



## ギネスとメールとナナカマド

風花 小町

8月19日(木)夕刻、エディンバラの空港に着いてホテルに向かう車中からまず目に入ったのがナナカマドの赤い実、そして早朝ホテル近くを散策しながら家々の小さな前庭に見たのがアジサイの紫色の花、バラも咲いていたしペテュニア等の花も…。日本の初夏から秋までの季節が一時に来たような不思議な光景でしたが、これがスコットランドなのですね。麦も刈り入れの頃らしく大きく家畜の飼料用に丸められたものが広い畑にころがっていました。そして幸せなことに天候に恵まれ、緑がきれいでした。ゆったりとした時の流れが実感できました。

こうして楽しく思い出深く旅のことを振り返ることができるのも、一緒に行った人達のやさしさと協力があつたからだし、私達の受け入れに向けて準備をして下さった方々のおかげだと、ひと息ついた今ますます強く思っています。

その中でも私は St. Cuthbert's Episcopal 教会での公演のため何度かメールのやりとりをしてお世話になったイアンさん (Ian Harkness / Japan Society of Scotland) と娘のアンジェラさん (Angela Robertson / The Japanese Local Government Centre in London) のことについて書いておこうと思います。

今回の公演企画の初めの段階からイアンさんとは接触がありました。無限響の二ールとミユキさんが話を持ち込んだ時、日本とスコットランドの文化交流という趣旨を理解し快く引き受けて下さいました。

やりとりの途中でわかったことですが、イアンさんは福井や永平寺を訪ねて楽しい思い出もあるとのことでしたし、娘のアンジェラさんは富山県の学校で英語を教えるということもあるとのこと。縁というものを感じました。

その上「受け入れ準備は順調に進んでいるから何の心配もしないでいいよ、すべてまかせて…」とまでキッパリと言って下さり、どれだけ力づけられたか知れません。

出発までの1ヶ月を順を追って説明しましょう。

7月16日 いよいよプログラム用の原稿を送るようイアンさんからメールが入りました。

7月21日 コスモスの田中浩先生がフランスから帰られるのを待ち、吉田先生と曲目、曲順の最終決定をしていただいて、日本の曲には英語のタイトルを付けて送りました。

8月4日 7月21日に原稿をメールで送ったのに何の反応もなく、ここにきてのプランクは長く感じました。向こうの機械の故障だったのですが、11日にやっと確認がとれました。

8月11日 「娘のアンジェラが当日ロンドンから出向いて来て通訳をしますよ」とイアンさんの方から声をかけて下さいました。あつかましくもこちらからは、「ボランティアでなら」とお願いしました。勿論そのつもりだったのでしょうが、そこは交渉ごとなので…。

8月13日 勿論OKの返事。それならと、アンジェラにコメント用解説の文章を送って、詳しくは19日ホテルで会ってから、と約束を入れました。

8月18日 出発の前日です。朝方イアンさんから「教会での演奏会の後小さなパーティを用意しましたよ」というメールが入り、「ありがたくお受けします」の返事を出しました。信頼関係が成り立っていることを感じられてひと安心。

8月19日 午前4:30 福井駅東口集合。

(以上はイアンさん関連のことがらだけです。)

教会での演奏会当日、大きくアレンジされた花、プログラム、それに出演者全員に心のこもった歓迎のカードが用意され、主催者側の暖かさがジーンと伝わって来ました。

結果が大成功に終わったのは皆様がよくご存じですので…。パーティもなごやかで、盛り上がりましたよね。

一言つけ加えておかなければならないのは、メールという文明の利器が大いに活躍したということです。私には娘が残していったワープロとFAX、電話、携帯のショートメールしかありませんでした。海外との交渉はすべて田中和代さんのメールを通してあたりました。私が出したい時はまずワープロで書き FAXで和代さんにそれを彼女がメールに打ち直しては送る。向こうからのものはFAXで我家にという方法でやってきました。本当にやっかいな手間をかけさせることになってしまいました。ですが発信元が一つになったことで混乱を避けることができたかな、とも思っています。二人が同じ情報を常に共有できていましたから。

最後に

「エミリー・ブロンテの『嵐が丘』を学生のころ原書で読んだことがあるんだよ」とヒースの生えている丘を見ながら若いころをなつかしむように話して下さった吉田先生(フラウエンコール) 最初から最後まで青年のように情熱的でした。(Wenn ich ein Glöcklein wär の日本語歌詞は吉田先生の手になるものです。)

田中浩先生はハンチング帽にビデオカメラを首にかけての登場でした。今回の企画でもいつも通りコスモスのメンバーにまかせて下さいました。というより元気じるしのコスモス女性陣の方が、いつも待っていられなくて先走るのかもしれないね。ともあれ黙って見守っているということも忍耐のいることですよね! 先生、今後ともよろしくお願ひします。

今回は二人のタイプの異なる指導者に恵まれ、カラーの違う二つの団のメンバーが一つに集い楽しく演奏旅行を終えて帰れたことに大感謝している私です。公演を無事終え

て飲んだ地元ビールのギネスの味のおいしかったこと。当分この味は心に残りそうです。  
(2004.9.18 記)